

語註・典故・作詩メモ

・星散…星が分布するように、四方に散らばること。
 ・太虚…おおぞら。天空。

その他のメモ

結句

転句

承句

起句

詩題

星

祇

歸

春

月下看櫻

散

今

人

日

瓊

月

扶

道

葩

冷

路

遥

払

被

歩

返

太

櫻

徐

照

魚韻

虚 ◎

樹 ●

徐 ◎

初 ◎

読 み 下 し 文

星散す瓊葩

太虚たいきよを払ふ祇ただ今 月は冷やかに 桜樹を被ひ歸人 路に扶よりて 歩みは徐々たり

春日 逍遥す 返照の初め

月下看桜

作詩日

令和三年五月十一日

平仄式

仄起式

名前

牛山 知彦

語註・典故・作詩メモ

課題詩

故人ー友人

結句	転句	承句	起句	詩題
獨 憩 縁 台 憶 故 人◎	東 風 一 陣 吹 何 處●	櫻 花 漾 漾 月 光 頻◎	曳 杖 黃 昏 山 寺 春◎	月下看櫻 眞韻

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

その他のメモ

ひとり・えんだい いこ ひとり縁台に憩い 故人を憶う	とうふう いちじん どこ 東風一陣 何處からか吹く	おうか ようよう げっこうしき 桜花 漾々 月光頻りなり	つえ ひ こうこん でらやま はる 杖を曳く黄昏 山寺の春	げつか さくら み 月下に桜を見る
----------------------------------	------------------------------	---------------------------------	----------------------------------	----------------------

平仄式	仄起式	名前
作詩日	令和三年七月	宇野 次郎

語註・典故・作詩メモ		

結句	転句	承句	起句	詩題
梁 ○	如 ○	臥 ●	細 ●	春燕歸巢
上 ●	今 ○	看 ○	雨 ●	
無 ○	何 ○	甃 ●	陰 ○	
聲 ○	在 ●	砌 ●	雲 ○	
午 ●	舊 ●	緑 ●	晝 ●	
院 ●	巢 ○	苔 ○	掩 ●	刪韻)
閑	燕 ●	斑	關	

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

その他のメモ

文 し 下 み 読				
梁上 声無く 午院閑なり	如今 何処に在りや 旧巢の燕	臥して 甃砌の緑苔の斑なるを看る	細雨 陰雲 昼 関を掩い	春燕 巢に帰る

作詩日	名前
令三・五・提出	岡嶋宣昭

舊巢燕 旧巢(そう)の燕
 晝掩門 昼も門を閉めておく
 甃砌(しゅうせい) = 庭の石畳

語註・典故・作詩メモ

＊海嘯：津波
 ＊嘯：口をすぼめて声を出す。（風・波などが）うなり
 ＊承句は杜甫「詠懷古蹟、五首」の句に負っている。
 ＊作詩メモ：仙台東松島市に居住していた身内が東日本
 大震災の津波で家屋が流され、仙台市内を転々として
 未だ故郷に戻れない無念さを詩にしました。

その他のメモ

結句	転句	承句	起句	詩題
鳴 ○	春 ○	漂 ○	突 ●	春燕归来
呼 ○	燕 ●	泊 ●	然 ○	
郷 ○	帰 ○	仙 ○	海 ●	
土 ●	来 ○	台 ○	嘯 ●	
未 ●	翔 ○	天 ●	衍 ●	
猶 ○	雁 ●	地 ●	波 ○	刪韻
還 ◎	北 ●	間 ◎	湾 ◎	

読み下し文

しゅんえんきらい
 春燕归来
 とつぜん かいしょう なみわん あふ
 突然の海嘯 波湾に衍れる
 ひようはく せんだいてんち かん
 漂泊す 仙台天地の間
 しゅんえんかえ きた がんきた と
 春燕帰り来り 雁北に翔ぶ
 ああ ふるさと いま なおかえ
 嗚呼 郷土よ 未だ猶還らず

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

平仄式	平起式	名前
作詩日	令和三年三月	高橋幸雄

語註・典故・作詩メモ				結句		転句		承句		起句		詩題	
嬋娟：容姿のあでやかで美しいさま 皎皎：月の光が白く見えるさま m				淑 ○		清 ●		嬋 ○		知 ●		月下看櫻	
				酒 ●		光 ○		娟 ○		己 ●			
				歡 ○		皎 ○		櫻 ○		被 ●			
				談 ○		皎 ●		樹 ●		吾 ○			
				適 ●		照 ●		遶 ●		招 ○			
				興 ●		佳 ○		池 ○		夜 ●		覃韻	
				酣 ◎		宴 ●		潭 ◎		庵 ◎			

[illegible]

文	し	下	み	読
月 げつ 下 か 看 かん 櫻 おう	知 ち 己 き 吾 われ を を し し て て 夜 よる の の 庵 いおり に に 招 まね か か し し む	嬋 せん 娟 けん た た る る 櫻 おう 樹 じゆ 池 いけ の の 潭 ふち を を 遶 めぐ る	清 せい 光 こう 皎 こう 皎 こう と と 佳 か 宴 えん を を 照 て ら ら す	淑 しゆ 酒 くしゆ 歡 かん 談 だん ま ま さ さ に に 興 きよう 酣 たけなわ

(七言絕句)

作詩日	R 3 . 5 . 1 1	平仄式	仄起式	名前	武田 一郎
-----	---------------	-----	-----	----	-------

語註・典故・作詩メモ									

その他のメモ									

結句	転句	承句	起句	詩題
明 ○	鳥 ●	幽 ○	月 ●	月下看櫻
朝 ○	没 ●	色 ●	光 ○	
共 ●	孤 ○	陶 ●	鮮 ○	
起 ●	思 ○	然 ○	耀 ●	
聴 ●	我 ●	庭 ○	照 ●	
聲 ○	將 ○	樹 ●	櫻 ○	麻韻
嘩 ◎	眠 ●	誇 ◎	花 ◎	

読み下し文				
明朝共 みょうちゆうきょうきよ に起 お きん 声 こゑ の嘩 かまひ しきを聴 き けばなり	鳥没 とりぼつ して孤 ひと り思 おも う 我 われ 將 まさ に眠 ねむ らんとす	幽色 ゆうしよく に陶然 とうぜん とす 庭樹 ていじゆ に誇 ほこ らん	月光 げっこう 鮮耀 せんよう にして桜花 おうか を照 て らす	月下看櫻 ゲツカカンオウ

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

平仄式	平起式	名前
作詩日	令和三年五月十二日	南上清一郎

語註・典故・作詩メモ	結句	転句	承句	起句	詩題
	不 ●	縦 ●	今 ○	鶯 ○	月下看櫻
	変 ●	令 ○	宵 ○	語 ●	
	翫 ●	悪 ●	月 ●	柳 ●	
	花 ○	疫 ●	下 ●	垂 ○	
	傾 ○	跳 ○	萬 ●	春 ○	
	玉 ●	梁 ○	桜 ○	復 ●	灰韻
盃 ◎	世 ●	開 ◎	来 ◎		
その他のメモ	読み下し文				
	変わ か らず花 はな を翫 め で、玉杯 ぎよくはい を傾 かたむ く	縦 たとひ 令 あぐえき 悪疫世 よ に跳梁 ちようりよう すとも	今宵 こよひ 月下 げつか 万桜 ばんあ 開 ひら く	鶯語 うぐい り柳垂 やなぎた れ春復 はるまた た来 き たる	月下看櫻 げつかかんあ

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】
(七言絶句)

作詩日	令和三年四月	平仄式	仄起式	名前
				平賀康雄

語註・典故・作詩メモ

結句	転句	承句	起句	詩題
天	櫻	万	待	月下看櫻
空 ●	樹 ○	朶 ○	開 ●	
一	長	垂	惜	
白 ○	堤 ●	江 ●	散 ○	
影	孤	花 ●	使	
如 ●	月 ○	落 ○	人 ●	尤韻
鉤 ◎	照 ●	浮 ◎	憂 ◎	

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

読 み 下 し 文

天空^{てんくう}に^{いつぱく}一白^{いっぱく} 影^{かげ}鉤^{こう}の^{ごと}如^{ごと}し

櫻樹^{おうじゆ}の^{ちやうてい}長堤^{ちやうてい}に^{こげつ}孤月^{こげつ}照^てり

万朶^{ばんだ}は^{こう}江^{こう}に^{たれ}垂^{たれ}れ^{はな}花^{はな}は^お落^おち^う浮^うか^ぶぶ

開^{ひら}くを^{まち}待^{まち}ち^ち散^ちるを^お惜^おし^み人^{ひと}を^{して}し^て憂^{うれ}へ^しし

詩題^{しだい}の^よ読^よみ

作詩日	平仄式	平起式	名前
令和三年五月十日			古川 彌

その他のメモ

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

結 句		転 句		承 句		起 句		詩 題	
舉 ●		來 ○		巢 ○		雙 ○		春燕帰巢	
翅 ●		往 ○		中 ○		燕 ●			
看 ○		親 ○		求 ○		差 ○			
兒 ○		鳥 ●		餌 ●		池 ○			
百 ●		孜 ○		覈 ●		羽 ●		(庚 韻)	
感 ●		孜 ○		相 ○		翼 ●			
生 ○		處 ●		争 ○		輕 ○			
読 み 下 し 文									
翅 はね を あ 挙げし こ 児を み 看れば		来往 らいおう の親鳥 おやどり		巢中餌 そうちゅうえさ を もと 求めて		双燕 そうえん の差池 しち		春燕帰巢 しゅんえんきそう	
百感 ひゃくかん 生 しょう ず		孜 し 々の處 ところ		覈相争 ひなあいあらそ う		羽翼 うよく 輕 かる し			

その他のメモ

語註・典故・作詩メモ

差池||燕が高く低く飛び交うさま

孜孜||つとめて倦まざるさま

10、

語註・典故・作詩メモ									

この時期、我がふるさとで西山と言っている安達太良山の雪が溶けだすと、燕たちが戻ってくる。それそれに、お目当ての去年の巣に戻り、補修をしてパートナーを迎えて子育てをします。

結句	転句	承句	起句	詩題
修 ○	自 ●	遠 ●	西 ○	春燕歸巢
容 ○	在 ●	載 ●	山 ○	
檐 ○	飛 ○	南 ○	解 ●	
際 ●	翔 ○	風 ○	雪 ●	
候 ●	探 ○	燕 ●	一 ●	
朋 ○	舊 ●	戻 ●	天 ○	灰韻
來 ◎	戸 ●	回 ◎	駘 ◎	

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

その他のメモ									

眠									
春燕歸巢									
西山雪解けて一天駘なり									
遠く南風に載って燕回り戻る									
自在に飛翔して旧戸を探索									
修容し檐際にて朋来るを待つ									

作詩日	平仄式	平起式	名前
令和三年五月九日			三浦 昭二

語註・典故・作詩メモ

歩月……月の光を踏んで歩く
 岸頭……岸のほとり
 碧漣……青いさざ波
 花唇……花びら
 ふたつながら

結句	転句	承句	起句	詩題
吾 ○	水 ○	岸 ●	河 ○	七言絶句 月下看櫻
思 ○	面 ●	頭 ●	塘 ○	
咲 ○	花 ●	老 ○	歩 ●	
散 ●	唇 ○	櫻 ○	月 ●	
両 ●	真 ○	映 ●	至 ●	
相 ○	似 ●	碧 ●	深 ○	先韻
妍 ◎	筏 ●	漣 ◎	淵 ◎	

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

その他のメモ

読み下し文

吾思う
 咲くも散るも両相妍なり

水面の花唇
 真に筏に似たり

岸頭の老桜
 碧漣に映える

河塘を歩月
 深淵に至る

月下看櫻

作詩日	平仄式	名前
令和三年三月六日	平起式	森谷正彦

語註・典故・作詩メモ

宇先ー軒先

春先燕が姿を現すと新鮮な気持ちを抱く
 その姿は過ぎ去ってきた子供たちを想起させてくれる。
 懐かしさと共に悠久の営み、自然のおおらかさを感じないで
 られない。

結句	転句	承句	起句	詩題
営 ○	献 ○	春 ○	薫 ○	雙燕歸來
営 ○	身 ●	燕 ●	風 ○	
光 ○	雌 ○	歸 ○	爽 ●	
景 ●	雄 ○	來 ○	快 ●	
世 ●	搬 ○	梟 ●	樹 ●	
人 ○	好 ●	宇 ●	花 ○	先韻
然 ◎	餌 ●	先 ◎	鮮 ◎	

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

その他のメモ

営えい営えいたる光こう景けい世せ人じん然しかり

献けん身しんなる雌し雄ゆう好よき餌えを搬はんぶ

春しゅん燕えん歸かえり来きたりて宇う先せん梟かしまし

薫くん風ふう爽そう快かい樹じゆ花か鮮あざやかなり

雙そう燕えん歸かえり来きたる

作詩日

令和3年5月

初稿

平仄式

平起式

名前

諸星暢義

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

平仄式	平起式	名前
山口 幸雄		
作詩日	5月12日	

詩題

飛燕歸來

元韻

薰風度谷鯉旗翻

碧宇浮雲日色暄

雙燕迷途來陋屋

開窓送客鳥聲喧

○鯉旗 鯉のぼり

○碧宇 青空 ○日色 日ざし



その他のメモ

これは実話である。

もう十年くらい前の五月、南房総の家に燕が二羽、突然飛び込んできて、出口を探して家の中を飛び回った。窓を開けてやったら一羽はさつさと出て行ったが、もう一羽はガラスにぶつかるなど、苦勞してから出て行った。

結句を「開窓送客鯉旗翻」窓を開け客を送れば鯉旗翻るとしたかったが。起句が決まらず、鯉旗翻を起句にした。

ひえん きらい
飛燕歸來

くんぶう たに わた り き ひるがえ
薰風谷を度り 鯉旗翻る、

へきう くも う にっしよくあたたか
碧宇雲を浮かべて 日色暄かなり。

そうえん みち まよ ろうおく き
双燕途に迷いて陋屋に來たる、

まど あ かく おく ちようせいかまびす
窓を開け客を送れば鳥声喧し。

